

2008 年版

川がなくなると虹の架け橋



生涯をアフリカにささげる市橋隆雄・さら 家族のおはなし



製作：市橋隆雄さんを支える会
イラスト： 奥田裕子 他

皆さんは地球儀を見たことがありますね。
地球儀では地図ではわからなかったいろんなことに気がきますよ。
地球ってほんとうに広く大きいんです。でも今は飛行機に1日のれば地球の裏側の国々に行くことができます。今では日本を出て世界の国々でくらしている日本人は100万人もいるそうです。今日は外国に住んでいる、ひとりである市橋隆雄さんのことをお話します。それでは約50年前に戻るタイムマシンスタート……



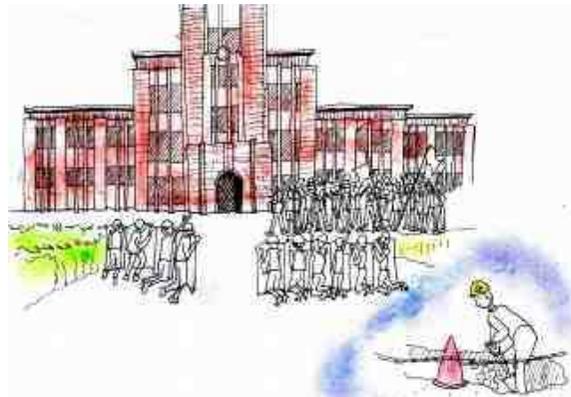
ここは三重県亀山市のまちはずれです。小学生の男の子たちが遊んでいました。隆雄くんは子ども達の大将です。みんなお腹をすかしています。「あそこのカキがうまそうだぞ」よその家のカキの木にのぼってカキ泥棒です。木に登りカキをとって下に投げるのは隆雄くん、受け取るのはその子分たちです。「こらっ、おまえたち！」おじいさんのどなり声がひびきました。ポケットにカキをつめこんでいちもくさんに逃げました。でもみんな貧しかった、この時代にはこんなことをする子どもたちがいるのがあたりまえで大人たちもむかし子ども



のときに同じ事をしてきたので許してくれました。

時はたち隆雄さんたちは中学生になりやがて高校に行くもの、卒業して都会に働きに行くものと分かれました。お互いのようすを知ることもできなくなりそれぞれが自分のまわりのあたらしい友人とつきあうようになりました。ちょうどそのころには日本は高度成長期といって暮らしが豊かになって家庭にカラーテレビがつき自動車まで買えるようになってきました。仕事がどんどん増えて、お金をかせぐのにみんなが朝早くから夜おそくまで必死で働きました。

たくさんの大学では若い学生と昔からいる先生と考え方があわず対立し授業もできない日々が続きました。学生たちは教室で人生や未来そして死について語り明かしました。でも



だれにも「自分はなぜこの世に生きているんだろう」という答えはわかりませんでした。

大学を出た隆雄さんは、人生に悩みいろんなアルバイトで暮らしを立てていました。道路工事や大きな船の底のさび落とし、ビルの窓ふきなどなんでもやりました。

そんなときに「青年海外協力隊」といって日本の政府が開発途上の国のおてつだいに若者を募集していたのでアフリ

カの北にあるエチオピアに農業の指導に行くことにしました。そこでは戦争が起こったり、国の中でお互いが殺しあっていました。

平和で豊かな日本とあまりにも違うくらし、食べるものもなくあすは生きてい

ないかもしれない、それでも人々は明るく笑い親切で思いやりがある。これはなぜだろう。若い日の隆雄さんにとって、この体験はその後の人生を決めることにな



りました。その後エチオピアでは戦争が、はげしくなつて隆雄さんは日本に戻りましたが再びアフリカに行く機会が巡ってきました。

こんどはケニアのナイロビにあるスワヒリ語の学校に行くことにしました。

ここでちょうど一緒になった仲間にその後、隆雄さんの奥さんになったさらさんがいました。「さら」って言う名前はちょっと珍しいですがキリスト教の聖書に出てくる女の人の名前です。さらさんはクリスチヤンの家庭に育って、いつかはアフリカのスラムで働きたいという夢を持っており大学を終わっ



です。すぐにケニアのことばであるスワヒリ語を学ぶ学校に来たのです。

スラムとは特に貧乏な人たちがばかりが集まった地域のことです。そこは汚く病気になって働けない人たちであふれていました。まだこれからの人生をどう生きようかわからなかった隆雄さんにとって希望にみちた、さらさんのひとみは、ひとときわまぶしく輝いて見えました。

隆雄さんたちはその学校でアフリカの言葉やその文化などアフリカの人たちと一緒に生きるのに必要なことを学びました。さらさんはナイロビのスラムで働き隆雄さんもそこを手伝ったりしました。その後帰国した隆雄さんは東京にケニア大使館ができたのでそこで通訳と翻訳の仕事をするようになりました。

隆雄さんは教会で洗礼を受けてキリスト教徒となり、さらさんと隆雄さんは結婚をしました。さらさん 23 歳隆雄さん 31 歳のときでした。



隆雄さんはキリスト教徒としてどう生きたらよい

かということで悩み、そのときひとりの人物に出会いました。その人が「あなたは何をして生きるかと、さがしているけれど、それではいつまでも答えはでない。何をして生きるかよりも自分は誰のために生かされているのかを考えなさい。それがわかればあなたは何をすればよいか分かる」

と言われたのです。隆雄さんたちのアフリカでの体験、決してそれは偶然じゃなく意味があったのだと気付きました。アフリカの人たちに出会ったこと。しかしその人たちはいま非常に貧



しく助けが必要だしこれから一緒に生きようと決心しました。でもそれはすぐにはできることではありませんでした。ほんとうにアフリカの人たちと一緒に生きる、それはお金持ちが貧しい人にもものにほどこす・・・そんな考えではできない大変なことなのです。

それで隆雄さんはキリスト教の牧師になる決心をしました。4年間牧師の勉強をし病気で身体が動かない子どもたちや心の病で社会で生活できない人たち、重い病気で死を待つだけの人たちと生活を共にしました。それも牧師になる大切な訓練だったんです。

それで1988年39歳のとき牧師となって家族と共にケニアにむかいました。始めてケニアに行ってから10年の歳月が経っていました。でもその10年間で学んだことや若い日々のアルバイトの経験がむだなく役に立つ時がきたのです。皆さんのなかにもいま悩んでいるひとがいるかもしれません。自分はなぜ学校なんか通っているんだろう。何でこんなさびしい、つらい日々をおくっているんだろう。

自分なんかいない人間だ、消えてしまいたい。
そんなあなたに隆雄さんは言います。
人生には自分の目には、むだでむなし
いと思えることがあるかもしれません。
でもそれはいつか実を結びあとで
役に立ちます。ただそれは今のあなた
には見えていないだけなのです。



ここはアフリカの東部ケニア
の首都ナイロビの空港です。は
るばる日本からやってきた家
族が降り立ちました。日本で生
まれた2人の子どもたち(4歳
と1歳)も一緒です。



隆雄さんの仕事はキリスト教
の牧師で宣教師と呼ばれてい
ます。外国(日本)からきた宣教師はケニアで働いてもお金をも
らうことは法律で禁止されています。現地の大学で講師もします
がそれは無料奉仕なのです。ですから家族の生活費はすべて日本の
派遣した教会からの仕送りです。

奥さんのさらさんはスラムで幼稚園を開きたいと希望をもって
いました。外国で仕事をするのはたいへんです。すべてその国の政
府の許しがいきます。

さらさんたちは役所に行ってスラムの子ども達の幼稚園を開く許
可をくださいと頼みました。でも役所の人あなた達は外国人だ。
スラムで幼稚園を開くのはケニア人の仕事だから認めませんと言
いました。さらさんたちはがっかりしました。

でも役人はお金持ちの子どもたちに
進んだ教育する幼稚園なら認めよう
と言いました。アフリカではお金持
ちと貧乏な人たちは別の世界に
いるくらい大きな違いなのです。
収入だって何百倍いや何千倍も違うのです。



住んでいる場所、家、着ている服、仕事、子どもたちの学校だっ
てまるで違うのです。貧しい人は一生貧しいし、その子ども達も
親と同じ貧しい生活を続けるしかありません。お金持ちは家に何
人もお手伝いさんを雇います。貧しい人はそこで掃除や料理をし
て、お金持ちからもらうお金で暮らすことができますし、その子
ども達も食べていけるのです。さらさんたちは考えました。この
国は一部のお金持ちが政治をしているうちはよくなる。お金
持ちの子ども達はみんなお金持ちになり将来国を治め自分達だけ
が良い生活を続けられる国をつくっていただけだ。これではいつ
までたっても変わらない。そんな子どもたちに幼い時から、優し
い心、助け合う心を身に付けてもらおう。そうすればその子ども
達が大人になり政治を握るようになったら国をもっと良く変えて
くれるかもしれない。そうだ、お金持ちだけの幼稚園もいいじゃ
ないか。



こうして幼稚園を開きました。さ
らさんは幼児教育の経験者です
から現地の先生達により進んだ指
導方法を教えました。こうして
できたキューナ幼稚園は素晴らしい
教育をしてくれる幼稚園だと評判が

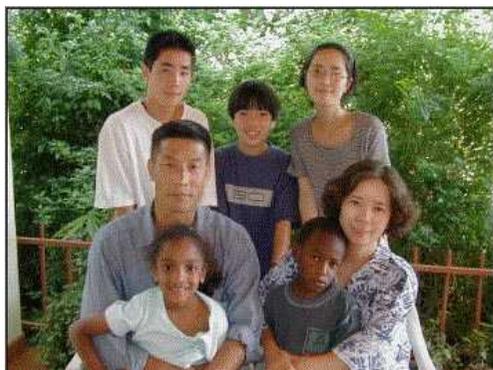
広がりお金持ちの親の子ども達が
どんどん集まってきました。

なんと国で一番のお金持ち、大統領の孫まで通うようになりました。子ども達には幼いうちから貧しい人たちと一緒に生きること、相手を愛し尊敬し、その人たちのために何をしたらいいのかを教えるようにしています。その幼稚園は日曜には教会となって親たちもその家で働く貧しい人も一緒に集まってきます。隆雄さんは牧師ですからみんなに人の生き方を教え導き心豊かに暮らせるようお祈りをします。

隆雄さんとさらさんはアフリカに生涯をささげる覚悟でやってきました。そこで親に捨てられたアフリカ人のふたりの赤ちゃんを自分達の家族にむかえることにしました。1人は生まれたばかりの女の子で栄養が足りず

命が危ないほどやせていました。それに母親はエイズという怖い病気にかかっていたようです。

もう1人の男の子はある外国人の家の前に捨てられ寒さの中、奇跡的に助かったそうです。



ふたりとも市橋さんたちの家族にならなかつたら、もうこの世にいなかったかもしれません。でも2人とも家族のひとりとして愛され、すくすく育っています。

さらさんはこう言っています。「同じ両親から生まれても皆違うのだから肌の色が違うとか生まれ方が違うとかは違いの中のひとつでしかないと思うんです。だから子どもたちにも3人は私のお腹から生まれたし2人はママじゃない人のお腹から生まれたけど皆

パパとママの子どもなの。それは生まれ方が違うだけでみんな私たちの子どもなのよ。」

このような仕事をしてきた市橋さん家族にたいへんな出来事が起こりました。日本の経済が悪くなり今までお金を送ってきた東京の教会がもうこれ以上ケニヤを助けることができないから宣教師を辞めて日本に帰って来いと言ってきたのです。お金を送ってくれないと市橋さんの家族は生活できません。養子にしたアフリカ人の2人を含め5人もいる子ども達を学校に通わすこともできません。隆雄さんは困って2000年の秋に日本に来て全国を巡り自分達が今までどおりケニヤで活動を続けられるよう援助してくださいと各地で講演やお願いをしました。三重県の亀山市は人口5万人の小さなまちですが隆雄さんの出身地です。隆雄さんを覚えていた中学校の同期生が37年ぶりに何

十人も集まりたちまち「市橋隆雄さんを支える会」ができショッピングモールで募金活動を始めました。地域のライオンズクラブでも毎年、支援のバザーを開いています。鈴鹿市のショッピングモールイオンでのレシートキャンペーンも活用しています。こうして集められた、お金はもちろん大切です。でもそれ以上に遠い母国から自分達を支援してくれる人たちがたくさんいる。そのことが励ましとなって市橋さんたちの活動の原動力になっているのです。



市橋さんたちの活動はケニヤの人たちの心を動かし 2003 年に念願のスラム地区への幼稚園もできることになりました。

でもそれは簡単ではありませんでした。親がひじょうに貧しく母親しかいなかったり字も読めない人が大半です。教材費どころか給食費だって払えない家庭の子がほとんどです。

子ども達の健康状態もよくありません。一日一回の食事がやっとで栄養不足で発育が悪く、お腹にはいっぱい寄生虫がいます。その日暮らしの毎日の生活で幼稚園での集団生活もできそうにありませんでした。



先生達の苦難の日々が始まりました。子ども達が規則正しく食べ遊び学ぶ、その習慣がつくまで繰り返し、がまん強く教えました。

さらさんは親に会い、なんとしても給食費を払うようお願い

いしました。お金持ちが代わって払えばいいと思うかもしれませんが、でもそれでは問題は解決しないのです。親が自分の子どもの将来に責任を持つためにも最低限の負担は必要なのです。お金が払えなくても子どもを幼稚園から追い出すことはありません。でも親が給食費などを払うようになるまで何度でも話しあいます。



先生達の苦勞が少しずつ実ってきました。半年も経つと、お腹から寄生虫が消え子どもたちの目が輝きだし動きも生き生きしてき

ました。集団生活にも慣れマナーも言葉使いも良くなって来ました。遠足に連れて行ってもスラムの子どもだと信じてもらえないほどに変わってきたのです。先生達も「幼児教育ってこんなに素晴らしいの」と驚きと喜び、そして感動の日々です。

いまでは幼稚園だけでなく 4 歳児から小学校 4 年生までの子どもたち 65 名が通うコイノニアアカデミーとして成長しました。英語、絵画、陶芸、空手等、お金持ちの子どもが通うキューナ幼稚園と変わらないレベルの教育を貧しい子どもたちにも与えています。日曜の朝にはこの子達もキューナ幼稚園で開かれるサンデースクールに歩いてやってきます。さらさんの話すお話を聴いたり歌ったりしたあと皆でランチを食べます。



養子にしたリベカちゃんもすっかり娘さんです。ノア君もたくましく育ちました。アフリカには星の数ほどの孤児がいます。今はたったふたりの子どもしか養えないけど、この子ども達がいつの日か一粒の麦から畑いっぱい実るように自分達の意志をついで素晴らしいアフリカを創ってくれるかもしれません。

民族を、国籍を、血のつながりを超えた家族がいつも一緒に助け合い、どんなに苦しくても希望を忘れないで必ず良き日が訪れることを信じて生きています。

部族の対立での争い、食糧不足、極端な貧富の差、学校にいけないことによる読み書きのできない人たち。さらにはエイズのまんえんによりどんどん増える病死者。それでもアフリカには私たちがものの豊かさがゆえに忘れかけた人として生きる知恵、助け合

う心があるそうです。そこで日本人は日本で身につけてきた知恵を出しアフリカの人々と共に働くことでいつの日にか、よりよいアフリカをつくり上げる夢をかなえたい。隆雄さんたち家族はそう思っています。そしてできる範囲でいいから自分たちのことを知ってもらいたい。できればいつかあなたたちもアフリカに来て自分達と一緒にアフリカと日本の架け橋になってほしいと願っています。



「市橋隆雄さんを支える会」のロゴです。Amaniとはスワヒリ語で平和の意味、赤は赤道、虹は希望のシンボル

「市橋隆雄さんを支える会」は亀山市民と亀山中学同窓生を中心に2000年11月に発足しました。現在では広く亀山市以外の市民



の皆さまや世代を超えて約150名の会員を有し会費(年間2,000円)と募金やバザーをつうじてケニヤの市橋さんに全額を支援金として送っています。また国際協力の講演会等を開いています。

2005年、2007年には会員有志がケニヤに旅行し両幼稚園やスラムを訪問し市橋さんたちの活動を実体験しました。その折、日本で集めたピアニカ等を贈呈し音楽教育に活用しています。

スラムの子どもへの個人スポンサー制度もあります。毎月5,000円で3年間子ども1人の学資を支援します。現在、当会の扱いで10名のスポンサーがいます。

市橋さんたちの活動の様子がネット上で動画で見れます。

<http://amaniafrica.web.fc2.com/>



現地の様子のDVDも作りました。

亀山市東町の市民のショッブ

「ねこの館」にあります。1500円です。

世界人口の50%の人は、世界の富の1%を分け合っている。

2006年 国連広報センターより

アフリカにつなぐ虹の架け橋 2008年版

製作発行 市橋隆雄さんを支える会

事務所 〒519-0125

亀山市東町1-2-22 ねこの館内

連絡先：090-8550-8318

Email amani@kdn.ne.jp

ホームページ

<http://www.kdn.ne.jp/~amania/sasae/>

支援金受付等 郵便振替口座番号

00800-0-41891

口座名称 市橋隆雄さんを支える会

この小冊子は2007年度下期イオン株式会社
ジャスコ鈴鹿ベルシティ店での幸せの黄色い
レシートキャンペーンの助成金で製作しました。